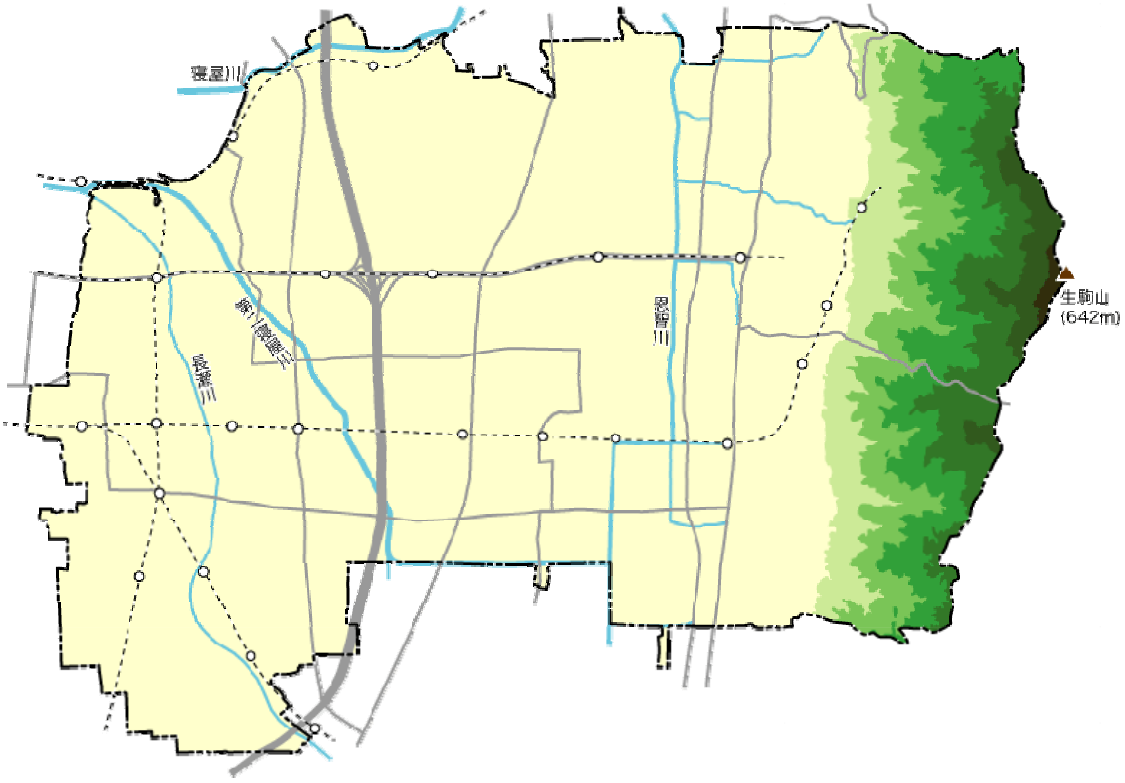
第１章　東大阪の景観

（1）位置と地勢

東大阪市は、淀川と大和川にはさまれ大阪市の東に隣接する東部大阪地域のほぼ中央に位置し、東西11.2km、南北 7.9km の広がりをもつ南西部にややふくらんだ長方形で、その面積は 61.81km^2 です。

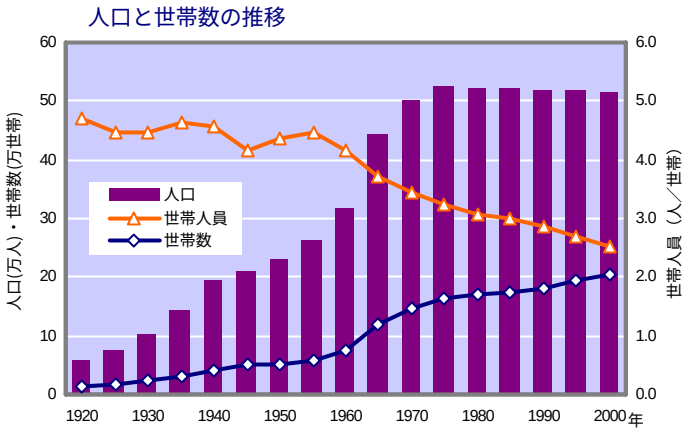
市域の東部には、標高 642m の生駒山を中心に生駒山地が南北に連なり、山麓では扇状地が緩やかな傾斜をみせています。その西側には、標高 5～6m 前後の平地が広がり、南から、第二寝屋川と長瀬川が北西へ流れ、生駒山地の谷川の水を集めて恩智川が北上しています。また寝屋川が北部を西へ流れています。



位　置	**東経** 135°33′35″～ 135°40′54″ **北緯** 34°37′44″～ 34°42′04″
広がり	**面積** 61.81km^2　**周囲** 44.8km **東西** 11.2km　**南北** 7.9km
海　抜	**最高** 642.27m　**最低** 0.54m
気　象 (2003 年)	**平均気温** 16.9℃　**年間降水量** 1528.5mm

（2）人口と世帯数

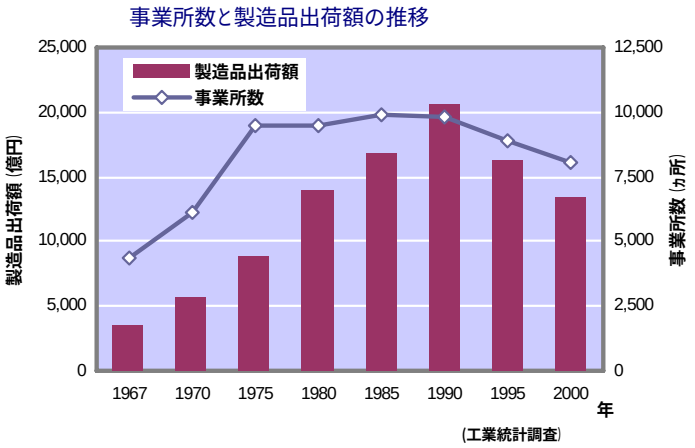
2000(平成 12)年の国勢調査によると、東大阪市の人口は 51 万 5094 人、世帯数は 20 万 3392 世帯です。その推移をみると、高度成長期にはいった 1955(昭和 30)年頃から、人口も世帯数も急増しています。しかし、1975(昭和 50)年頃から、人口は緩やかな減少傾向に転じています。いっぽう世帯数はその後も緩やかに増加しつづけ、1955(昭和 30)年に 4.45 人だった世帯人員が 2000(平成 12)年には 2.53 人にまで減少し、少子化が進むとともに高齢者夫婦のみの世帯や単身世帯が増えていることがうかがえます。



（3）産業

①工業

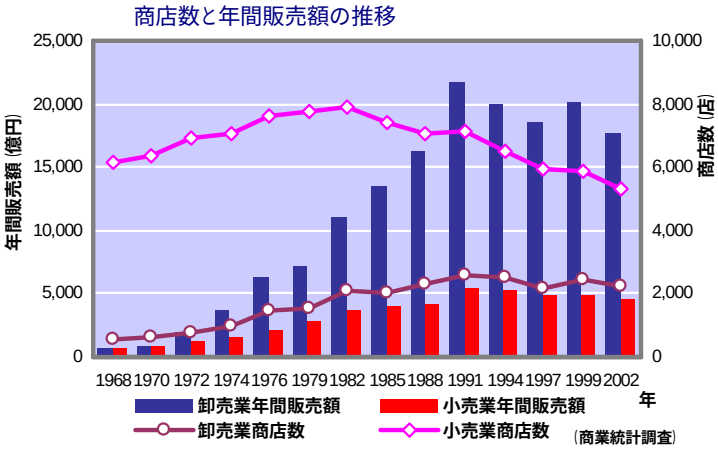
東大阪市は全国有数の工業都市として発展するとともに、工場密度が全国一の「中小企業のまち」としても知られています。明治以降、鉄線・金網・作業工具・鋳物などの地場産業が発達し、戦後はボルト・ナット等の工業がくわわって、重化学工業化が急速に進むなか一層の発展をみました。しかし、産業構造が移り変わる昭和 40 年代以降は、かわって機械金属関連製造業やプラスチック製品製造業がその比率を高めています。このように、さまざまな業種が集まり有機的なネットワークを確立している製造業も、バブル経済の崩壊の影響などによって、事業所数・製造品出荷額ともに減少をつづけています。



②商業

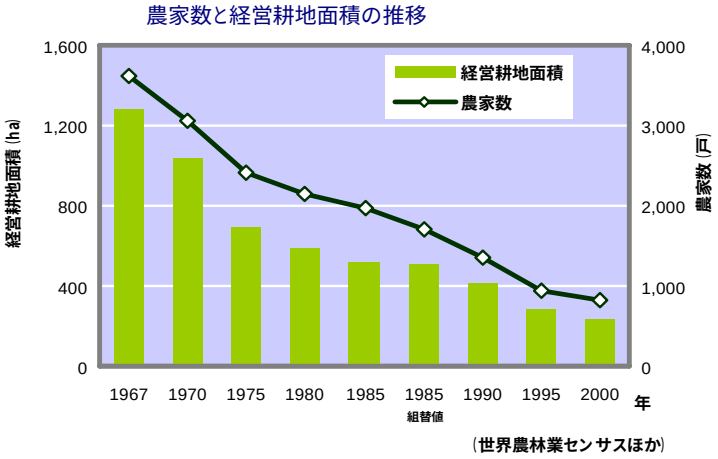
東大阪市の卸売業は、高度成長期に大阪市からの移転が進んで大きく発展し、商店数・従業員数が大阪市に次ぐまでになっています。それは、機械卸業団地や紙文具団地などが相次いで造成されたことにくわえ、大阪中央環状線や築港枚岡線などが開通したことによるもので、なかでも長田・本庄地区は大阪の物流と卸売の新たな拠点地域となりました。しかし、バブル経済が崩壊し景気の低迷が長期化するなか、これまで大幅な伸びをみせていた商店数・販売額とも伸び悩んでいます。

いっぽう小売業は、鉄道沿線で市街化が進んで、商店街や小売市場が形成されたことにはじまります。高度成長期になると駅前を中心に集積が進み、昭和４０年代以降は量販店などが立地するようになりました。近年、年間販売額はほぼ横ばいですが、商店数は減少し、逆に売場面積は大幅に増加しています。これは、売上高の減少や経営者の高齢化、後継者不足などの問題により、商店街などの小規模店舗が減少し、量販店等の業態が増加したからでしょう。



③農業

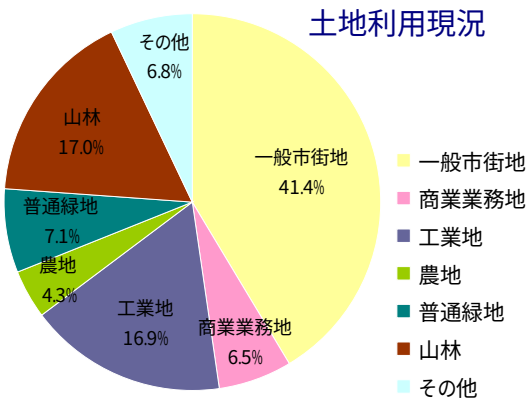
市域では、池島遺跡に見られるように古くから稲作がおこなわれてきました。大和川付替のあと綿花の栽培が盛んになりましたが、明治になって外国綿が輸入されるようになると衰退し、かわって軟弱野菜や花卉（かき）の栽培が発展しました。戦後は都市化の影響を受け、農家数・経営耕地面積ともに減少をつづけていますが、都市近郊農業の特色を活かし、軟弱野菜や花卉など特産的な農業経営が比較的安定した形態をみせています。



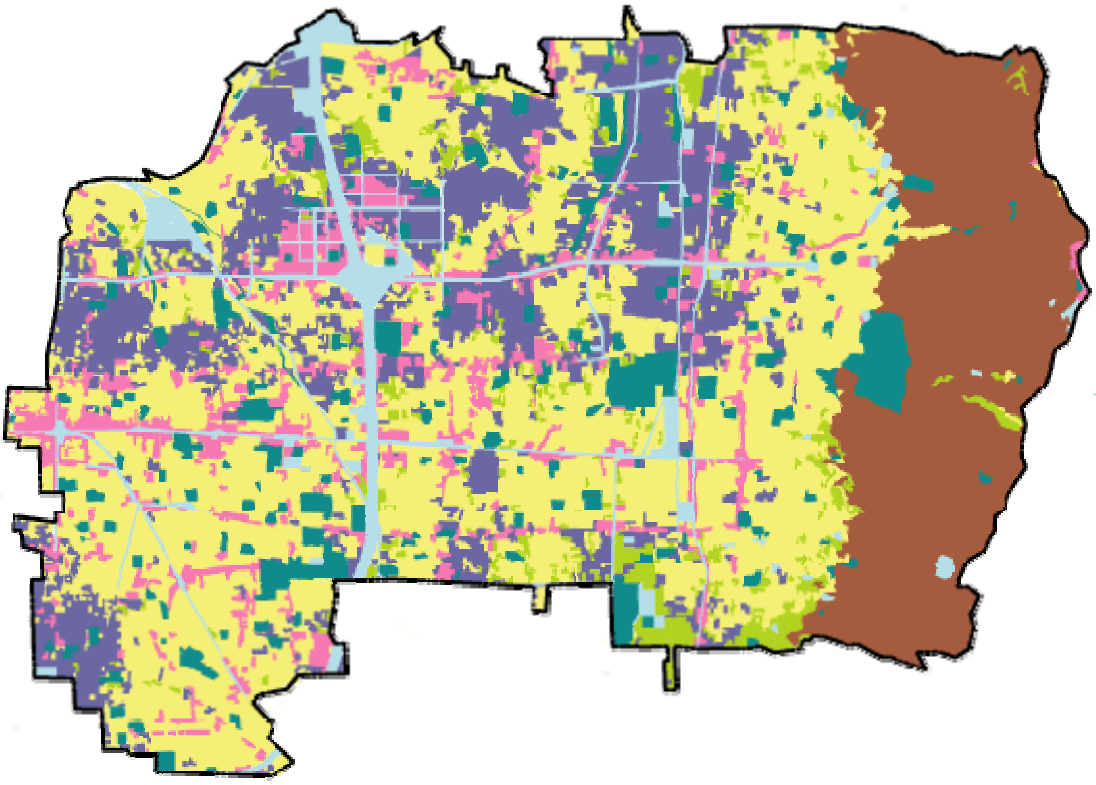
（4）土地利用の状況

都市計画基礎調査によると、2000(平成12)年現在で、市街地の占める割合は64.8%で、そのうち一般市街地が41.4%、商業業務地が6.5%、工業地が16.9%です。そのほかは、農地が4.3%、普通緑地が7.1%、山林が17.0%、その他6.8%となっています。

その分布状況をみると、生駒山地や池島・横小路の農地、規模の大きな公園などをのぞくと、市域のほとんどはすでに市街地となっていて、なかでも大阪市に隣接する高井田や柏田・衣摺と大規模な区画整理が実施された国道308号の沿道で工業地の集積が際立っています。いっぽう鉄道の沿線には住宅を中心とする一般市街地が広がり、駅周辺や幹線道路沿道のほか、長田駅の北側で商業業務地が目立ちます。



(平成12年度都市計画基礎調査)



土地利用現況図

（5）地域資源

①自然資源

豊かな自然を残す生駒山地は、市域のどこからでも望むことができ、近郊緑地保全区域・金剛生駒紀泉国定公園に指定されています。府民の森やハイキングコースなどが整備され、枚岡梅林は観光スポットになっています。

大規模な公園・緑地として、枚岡公園や久宝寺緑地が開設され、花園中央公園の整備が進められています。そのほか、公園は計画のおよそ 7 割が開設され、緩衝緑地として整備された中部緑地や加納緑地をはじめ長瀬川緑地・楠根川緑地があります。また池島では、恩智川治水緑地が整備されています。

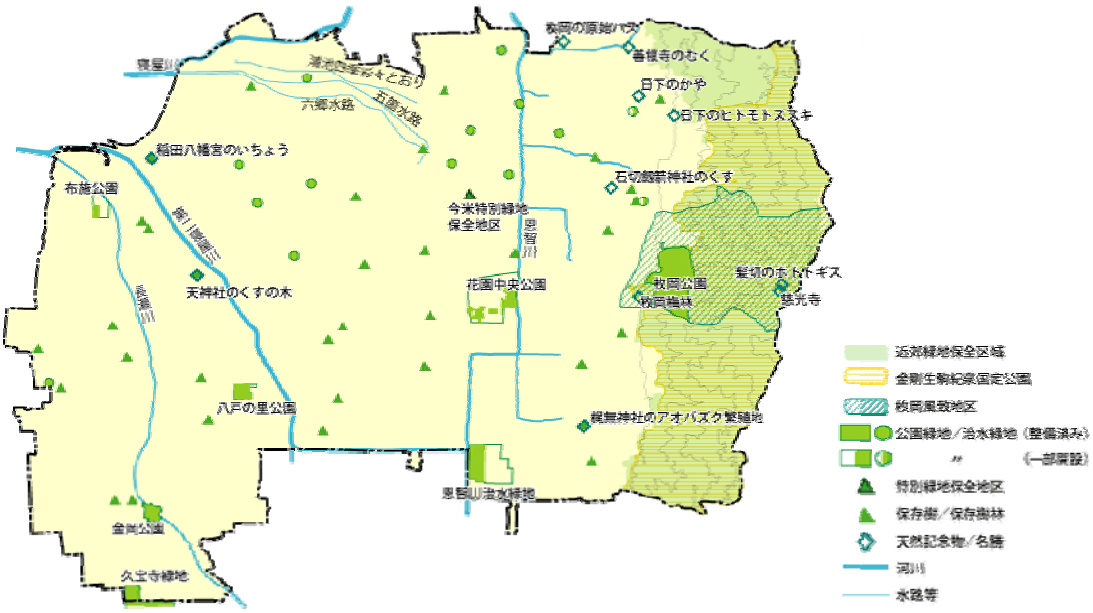
今米にある川中邸の屋敷林が特別緑地保全地区に、また神社の境内や民家に残る古木・大木が保存樹などに指定され、緑が少ない市街地にうるおいを添えています。枚岡の原始ハスや日下のヒトモトススキ、稲田八幡宮のいちょうなどが天然記念物に指定されています。

市内には、恩智川・第二寝屋川・寝屋川など大小の河川が流れていますが、これらはおおむね改修が終っています。このほか長瀬川や大川、五箇水路・六郷水路などで修景や親水の整備が進められています。

枚岡神社の南に広がる枚岡梅林は、市の名勝にも指定され、2～3 月にかけて 500 本の梅が咲き誇ります。
(出雲井町)

市街地にある屋敷林が特別緑地保全地区に指定されているのは、全国的にも珍しいケースです。
(今米1)

市内に計画されている地区公園と近隣公園あわせて 20 ヶ所のうち 17 ヶ所が開設され、市民の憩いの場となっています。
(本庄南公園･本庄中1)



②歴史資源

鴻池新田会所が国の史跡・重要文化財に指定されているほか、社寺の歴史的な建造物や地蔵石仏、また旧集落に残る古民家などが文化財に指定され、また日下貝塚や山畑古墳群・長栄寺境内・楠木正行墓・松尾芭蕉句碑などが史跡に指定されています。これら文化財のほかにも、大小の古墳が山麓に、地蔵石仏や石碑などがおもに旧集落を中心に残っています。

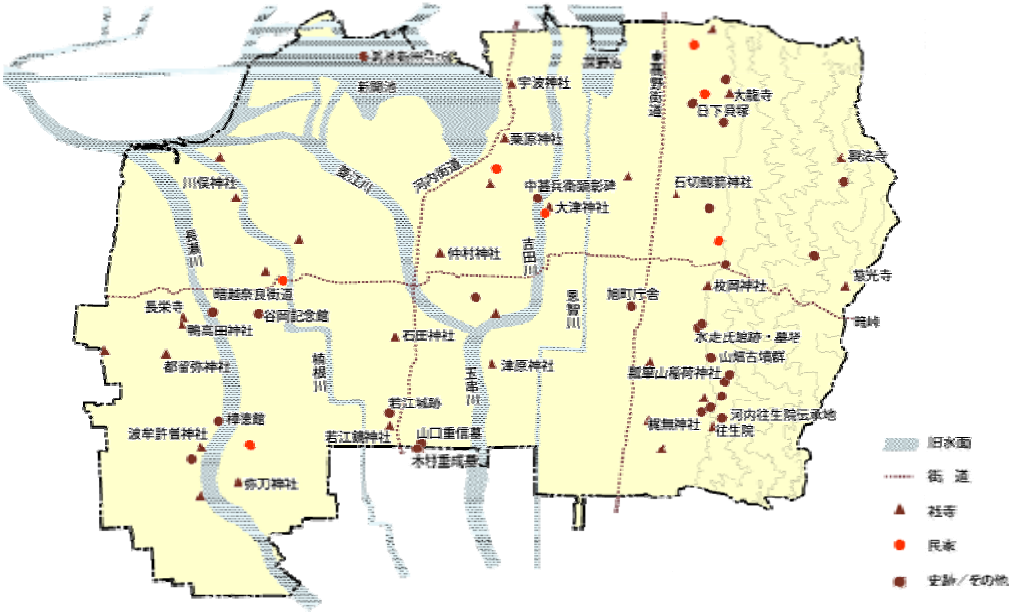
山麓にある東高野街道は古道のひとつで、京都と高野山を結ぶ道として発展してきました。また暗越（くらがりごえ）奈良街道は江戸時代に伊勢参りの道として栄え、松原は街道唯一の宿場としてにぎわっていました。ほかにも河内街道や八尾街道などがあり、これら街道沿いには道標が残っています。

「石切さん」と呼ばれ親しまれている石切劔箭（いしきりつるぎや）神社や河内国一ノ宮・枚岡神社をはじめ、市内には多くの神社があって、境内林など貴重な自然を残しています。また中世に栄えた興法寺や往生院などの寺院があります。

鴻池新田会所は、新田を管理･監督する事務所だった建物で、国の史跡･重要文化財に指定されています。
（鴻池元町）

市立郷土博物館周辺にある山畑古墳群のほか、生駒山麓にはたくさんの古墳が残っています。
（山畑 22 号墳･上四条町）

芭蕉は、元禄 7 年菊の節句に大坂へ向かう途中、暗峠を越え「菊の香にくらがり登る節句哉」の句を残しています。
（東豊浦町）



③都市資源

近鉄奈良線と近鉄大阪線が市域を貫き、また JR 片町線(学研都市線)が西北部を通っています。さらに地下鉄中央線が近鉄東大阪線と乗入れし生駒と結んでいます。これらの鉄道網は南北方向の結びつきが弱く、現在、大阪外環状線鉄道の建設工事が進められています。いっぽう道路は、近畿自動車道・阪神高速東大阪線のほか、大阪中央環状線・大阪外環状線・築港枚岡線が縦横に走っています。

公共公益施設は、市庁舎・リージョンセンター・市立総合病院のほか、府立中央図書館・郷土博物館・東大阪アリーナなどが開設され、中小阪には司馬遼太郎記念館が開館しています。また近鉄花園ラグビー場では全国高校ラグビー大会が毎年開催されています。

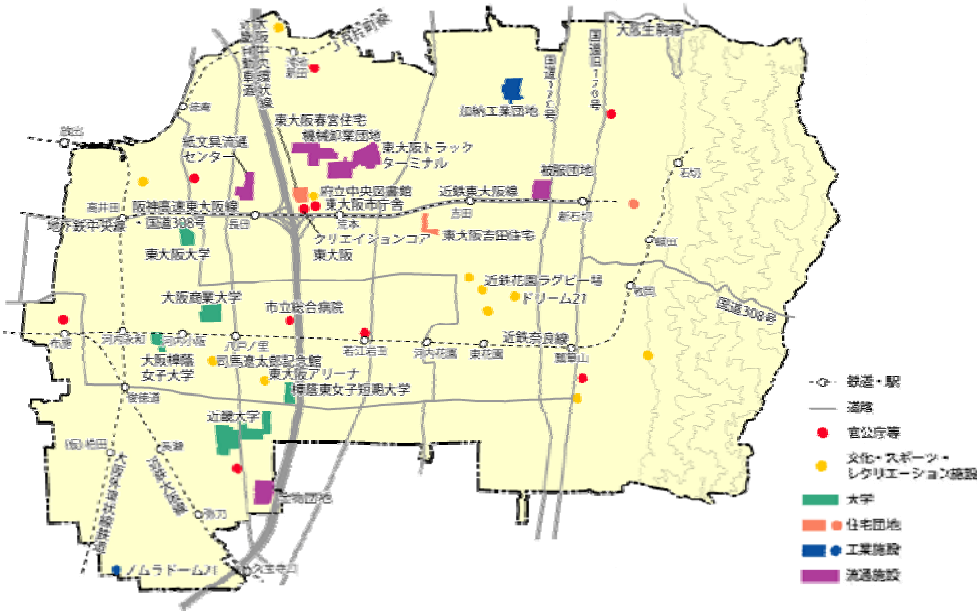
駅前では早くから商店街が発達し、とくに石切駅から石切劔箭神社までの参道には商店が建ち並び参拝客でにぎわっています。近年は大型店舗等が駅前や幹線道路沿道に立地するようになりました。また加納工業団地や被服団地・金物団地など特定業種が集約的に立地する企業団地があり、とくに長田・本庄周辺には、紙文具流通センターや機械卸業団地・東大阪トラックターミナルなど流通関連施設が多く立地しています。

そのほか、独特なデザインの東大阪春宮住宅や東大阪吉田住宅をはじめ若宮住宅などの公営住宅団地があります。また近畿大学や大阪商業大学・大阪樟蔭女子大学など 5 校の大学が集まり、「学生のまち」といった一面ももっています。

近畿自動車道と阪神高速東大阪線が交錯する荒本ジャンクションの構造物は、圧倒的な存在感です。
(荒本北･荒本西4)

近鉄花園ラグビー場では全国高校ラグビー大会が毎年開催され、全国からたくさんのラガー達が集まります。
(花園中央公園内･松原南1)

市内には5校の大学があり、多くの学生でにぎわい、若々しい活気が感じられます。
(近畿大学西門･小若江3)



１－２　東大阪のあゆみ

東大阪の景観は、それぞれの時代の暮らしのありかたにあわせて、人びとが環境に働きかけてきた長い歴史の成果です。そこでまず、東大阪の景観がどのようなものかを知るため、現在の東大阪がかたちづくられてきた、その成立ちをみてみましょう。

（1）東大阪の地形の成立ち

東大阪の地形は大きく、生駒山地と山麓の扇状地、そしてその西側に広がる平地にわけることができます。

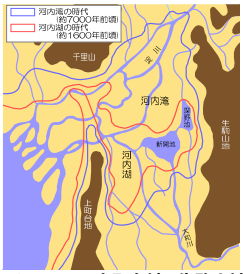
生駒山地と山麓の扇状地

生駒山地は、およそ 120 万年前から大阪側の山麓部にある生駒断層がくりかえし活動し、平坦な土地が隆起して形成されたもので、南北になだらかな稜線（りょうせん）をつくっています。急な斜面を流れる谷川が山を削り、平野にでたところで土砂を堆積（たいせき）させ、山麓には緩やかな傾斜の扇状地がつくられました。

市庁舎から生駒山地を望む

河内湾から河内湖へ

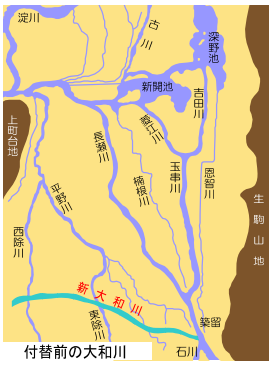
氷河期が終って海水面が上昇すると、低地では、「河内湾」と呼ばれる入海が広がり、海岸線が山地にまで迫っていました。大和川は分流しながら河内湾にそそぎ、川岸や河口に土砂を堆積させ自然堤防や三角州をつくっていました。その後は、海水面の低下と土砂の堆積で河内湾はしだいに小さくなり、やがて「河内潟」から「河内湖」と呼ばれる淡水湖になっています。



かつては、上町台地と生駒山地の間に入海が広がっていました。

氾濫する大和川との闘い

大和川は氾濫（はんらん）をくりかえしていましたが、古墳時代以降、強大化する権力を背景に河川改修が盛んにおこなわれるようになりました。近世になると、河内湖も土砂で埋まり、新開池（しんが）や深野（ふこの）池といった池沼になっていました。大和川は氾濫するたび堤防が築かれましたが、なお土砂が堆積し天井川になりました。このため低地では洪水にそなえ、水はけをよくするため恩智川や楠根川が改修されてきましたが、これらも一部は天井川になってしまいました。江戸中期になって、ついに大和川は付替えられ洪水被害は激減しましたが、低地の排水不良は変りません。



大和川は、石川合流点から西へ堺を通って大阪湾へ付替えられました。

都市化への対応

明治以降は市街化が進み、とくに戦後の急速な都市化によって低地では浸水の危険性が高まりました。このため、楠根川は第二寝屋川として付替えられ、恩智川も改修されました。また恩智川治水緑地や花園多目的遊水地といった大規模な遊水地の整備が進められています。

恩智川治水緑地（池島弥生橋）

（2）東大阪の歴史

原始の東大阪

縄文・弥生の集落

東大阪の歴史は今から数万年前の旧石器時代に遡（さかのぼ）ります。当時の遺跡は、海水面の上昇で水没して埋まり、現在確認できるのは山麓の遺跡のみです。河内湾が広がっていた時代、縄文人は山麓に集落をつくり採集や狩りや漁をして暮していました。稲作が伝わると、集落も平地にうつり低湿地で小規模な水田を営みましたが、やがて水田は水路や畔（あぜ）をもつ大規模なものにかわり、濠（ほり）をめぐらした大規模な集落も現れました。

復元された竪穴式住居
（発掘ふれあい館・南四条町）

氏社と古墳造営

大和政権が河内平野を支配下におさめると、その豊かな生産力は大和政権を支える基盤となりました。このころ豪族たちは氏（うじ）と呼ばれる集団をつくり、枚岡神社や石切劔箭神社など社を建てて氏神を祀（まつ）りました。古墳時代になると、市内最大級の瓢箪山古墳をはじめ山麓には大規模な古墳が築造されましたが、その後は、群集墓の姿を残す山畑古墳群など小規模なものに変わってゆきました。

石切劔箭神社
（東石切町1）

古代の東大阪

条里制と荘園の拡大

律令体制が整うと班田収授のため、湖沼であった地域をのぞいて条里制が敷かれました。条里制は、農地を 6 町(約 654m)四方の碁盤の目に区画する土地割の方式で、1 区画を「里」とし、南北に一条・二条・…、東西に一里・二里・…と呼んで、「里」はさらに 36 の「坪」に細分されました。その区画跡は現在でも池島周辺の農地に見られます。その後、口分田が不足し、朝廷は開墾を奨励してその私有を認めたため、貴族や社寺などはのちに荘園と呼ばれる私有地を広げてゆきました。

池島の条理制跡
（昭和 50 年・航空写真）

水走氏と大江御厨

平安時代、湖沼や河川の水面を含む広大な領域が、魚介類など水産物を皇室に納めるための大江御厨（おおえのみくりや）として設置されました。豪族の水走（みずはや）氏は湖沼にそった広大な土地を開発し、大江御厨を支配するほか多くの領地をもつ領主にまで成長し、鎌倉時代を通じて大きな勢力を保っていましたが、南北朝の頃には大江御厨もその支配するところではなくなっています。

水走氏の墓塔
（五条町）

中世の東大阪

南北朝の争い

鎌倉幕府が滅び建武の新政のあと、京都に幕府を開いた足利氏が吉野にのがれた後醍醐天皇と争った南北朝時代、真言道場として栄えていた興法寺・慈光寺・神感寺などが南朝方の城塞（じょうさい）となりました。南朝方についた楠木正行（くすのきまさつら）(小楠公)は、四條縄手の合戦で往生院に陣を構え、高野街道を南下してくる足利勢を往生院・神感寺で迎え討ち戦死しました。

小楠公銅像
(往生院六萬寺・六万寺町1)

若江城をめぐる争い

南北朝の争いが終わると、河内では畠山氏が守護となりましたが、このころ築かれた城塞のひとつが若江城です。その後、畠山氏の家督争いに端を発した応仁の乱は、やがて河内に主戦場が移り、若江城・誉田（こんだ）城をめぐる争いがくりひろげられました。このあと争乱と下剋上（げこくじょう）のなか、河内の支配はめまぐるしく移り変わります。織田信長は室町幕府を滅し、若江城に逃げ込んだ将軍・足利義昭を攻め、池田丹後守にこの城を与えました。池田丹後守は熱心なキリシタンで城下にキリスト教を布教しています。

若江城跡
(若江南町2)

近世の東大阪

大坂夏の陣

大坂夏の陣では若江が激戦地となり、豊臣方・木村重成は、徳川方・井伊直孝と玉串川をはさんで戦を交え、敵将山口重信と馬上で相討ちして戦死しました。現在第二寝屋川をはさんで二人の武将の墓があります。この戦いで豊臣家は滅亡し、以後河内地方は江戸幕府の直轄地となりました。

木村重成墓
(木村公園・八尾市幸町6)

大和川付替と新田開発

当時、大和川は、分流しながら北上し深野池や新開池にそそいでいましたが、天井川だったため大雨のたびに洪水になり、農民を苦しめていました。度重なる水害から救おうと今米村の中甚兵衛は、1704年ついに大和川の付替に成功し、池床や川床は埋め立てられて鴻池善右衛門による鴻池新田をはじめ多くの新田が開発されました。新田では綿花が栽培され、明治以降外国綿の輸入で衰退するまで「河内木綿」として全国に名が知られました。

中甚兵衛顕彰碑
(今米公園・今米1)

近代の東大阪

工業の発達

山麓では、江戸時代から、胡粉（ごふん）・薬種・撚糸（ねんし）・伸線などが、水車を利用しておこなわれていましたが、電気の供給とともに近代産業がおこり、伸線・鋳物・撚糸・金網の工場にくわえ、大阪市内の密集地を避けたマッチ・セルロイド・導火線などの工場ができました。なかでも枚岡の伸線は電気の導入により山麓から平地へと移り規模も大きくなって、第一次大戦を契機に一層発展しました。

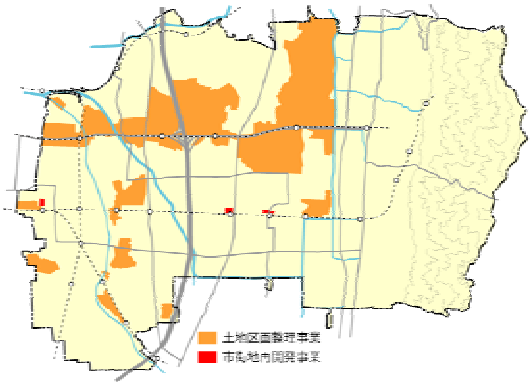
近代化へむけて

明治から大正にかけて、現在の JR 片町線や近鉄大阪線・奈良線があいついで開通すると、駅を中心に宅地化が進み、駅前には商店街が形成されるようになりました。また大阪市に隣接して工場地帯が発達し、「中小企業のまち」の原型となっています。

現代の東大阪

大規模区画整理

戦後なお、駅周辺をのぞいて農地が広がり、耕地整理などがおこなわれてきましたが、高度成長期をむかえると急激に都市化が進み、無秩序な市街化を防ぐために国道 308 号沿いで西部地区・東大阪開発地区・中部地区といった大規模な区画整理があいついで実施され、流通業務団地や工業団地が誘致されたため、周辺は関連した施設の立地が進みました。これらの事業で道路が整備され、また地下鉄が延伸されたこともあって、農地は住宅地や工業地へと変わってゆきました。



駅前再開発

いっぽう早くから市街化が進んでいた駅周辺では、密集市街地や商店街の空洞化が問題となり、都市機能の更新のため布施駅北口や若江岩田駅前で再開発事業が実施されています。これらの地区では「ヴェルノール布施」「希来里（きらり）」といった再開発ビルが建設され、駅前広場などが整備されました。また現在は、河内花園駅前でも再開発が進められています。

ヴェルノール布施
（布施駅北口・長堂1）

新都心の整備

近畿自動車道や阪神高速道路をはじめ広域交通を担う道路が交差する長田・荒本地区は、トラックターミナルや紙文具流通センター・機械卸業団地などが誘致されてきましたが、現在、流通業務機能ばかりでなく商業業務機能をはじめ多様な都心機能や地域中心核機能を集約した「新都心」として「産業・生活文化交流新都心の創生」をめざし、市庁舎や東大阪春宮住宅・府立中央図書館・クリエイションコア東大阪・大型店舗などが建設されています。

東大阪春宮住宅（中央）と府立中央図書館（右）
（荒本北）

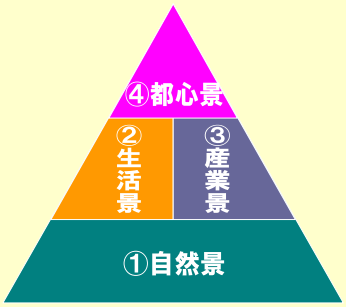
１－３　東大阪の景観の特性と課題

（1）東大阪の景観の構造

現在の東大阪をかたちづくってきた歴史のあゆみをふまえ、東大阪の景観の成立ち＝景観の構造をつぎのようにまとめることができます。

東大阪の景観の構造

①生駒山と大和川がつくりだした自然や地形・風土にはぐくまれ、大和川の氾濫と闘いながらも農村として発展してきた地域が、②鉄道の開通とともに沿線に住宅地を形成しつつ駅を中心に商業業務地を発達させ、また他方で、③道路の整備にともない地場産業から発達した工業地と流通業務地とを形成し、農地を住宅地や工業地に変貌させるなかで都市として発展し、現在、④中枢としての新都心を形成しつつある。



東大阪の景観構造

東大阪の景観は、このように、①自然景を土台として、そのうえに②生活景と③産業景が展開し、④都心景が全体をまとめる、といった構造をもっています。そして、それぞれの景観構造には、自然・歴史・暮らし・産業といったさまざまな景観要素があふれています。

東大阪の景観構造モデル

（2）東大阪の景観の特性と課題

東大阪の景観がどのように形成されてきたのかをふまえながら、東大阪の景観の特性と課題を整理します。

①自然景の形成

～原始的な自然生活～

原　始

生駒山と大和川によって東大阪はかたちづくられ、その豊かな自然の恵みを受けながら、人びとは採集や狩りや漁をして暮らし、山麓に小さな集落を営んでいました。

この時代、人びとの生活は自然に大きくのみこまれた状態で、人びとは自然に感謝し自然を敬い、目の前に大いなる自然の姿を眺めていました。

生駒山や大和川がかたちづくった自然や地形・風土は、東大阪で暮らす人びとの生活の基盤であり、その環境にふさわしい生活のしかたを工夫し、独自の産業と文化を築いてきました。ですから、そうした自然や地形・風土を軽んじると、そのうえに築かれるべき「東大阪らしさ」を失うことになってしまいます。

自然景では、生駒山と大和川がつくりだした自然や地形・風土が「東大阪らしさ」を生みだす基盤であることを充分に理解し、それらを保全・活用することが必要です。

②自然景から生活景の分化

～農村地帯としての発展～

古代～近世

稲作がはじまると、集落は平地にも移り水田が一面に広がりました。大和川はたびたび氾濫し堤防を築くなどの土木事業がおこなわれてきましたが、江戸時代になると、大和川は付替えられ新田が開発されます。

この時代、人びとは、点在する集落に暮らし、周辺の水田で働いていました。そこでは、人びとが暮らし働く姿が眺められます。

当時の生活は自然に適（かな）った仕方ですすめられ自然と調和したものでしたが、高度成長期になると、人びとの自然への働きかけは自然の流れを大きく乱し、経済発展のかげで自然破壊が進み、深刻な健康被害を生みだすまでにいたります。わたしたちの生活や産業が自然との調和を欠いたとき、その結果は、そのままわたしたちが受け取ることになってしまいます。

生活景と産業景では、自然を見つめ直し、自然と調和した生活のしかたと産業のありかたをつくりだし、自然がもたらす恵みとうるおいを享受できる環境をつくることが必要です。

③生活景から産業景の分化

～都市化の進展～

近現代

明治になると市街化が進み工業化への道を歩みはじめます。とくに高度成長期以降は市街地が無秩序に拡大し、農地は工業地や住宅地に変わり、生活の場と産業の場が切り離されました。

経済的に豊かになったこの時代、生活と産業のひずみが表面化して環境問題や都市問題が生まれました。

生活環境では自然や歴史・文化が失われ、うるおいとゆとりに欠けた特色のない街並みが広がりました。また早くから発達した商店街では近年、かつてのにぎわいや活気が失われています。

生活景では、歴史や文化、うるおいとゆとりを感じ、快適に暮らせる住環境をつくり、人びとの交流がつくる温かみの感じられる商店街のにぎわいや活気をとりもどすことが必要です。

産業環境では、「モノづくりのまち」として発展するいっぽうで住工混在地が形成され、近年は活力が低下しています。また幹線道路の沿道では流通業務地が発達し、周辺には倉庫などの親しみの感じられない街並みが広がっています。

産業景では、高い技術力を誇る「モノづくりのまち」として発展してきた歴史をふまえ、周辺の住宅地に配慮しながら、その活力を演出することが必要です。

④都心景の誕生

～新都心の形成～

現　在

広域幹線道路が交差する長田・荒本地区では、その立地を活かし広域物流拠点として流通業務地が形成されました。また近鉄東大阪線が開通すると、市庁舎や東大阪春宮住宅・府立中央図書館・大型店舗が建設されるなど、住宅・商業・業務・文化などの都心機能の集積が進んでいます。

現在、人・モノ・情報が交流する拠点として、「産業・生活文化交流新都心の創生」をテーマに地域産業機能の活性化と生活文化交流拠点の創出を目指すまちづくりが進められています。

東大阪新都心では、近年、都心機能の集積が進み、にぎわいや活気がもたらされつつあります。しかし周辺の流通業務地との調和がとれているとはいえません。また都心機能をさらに高め、東大阪の中心としてのイメージを創出していくことが求められています。

都心景では、生活と産業との調和を図りながら、東大阪を象徴する都心にふさわしい洗練されたイメージを創出することが必要です。